

## 第14回 外国語コンテスト

### 英語部門

第14回英語スピーチコンテストは、2008年11月25日に行われた。法学部・経営学部・現代中国学部の1年生から4年生まで計11名の参加者があった。英語スピーチコンテストでは、自作のスピーチを発表することになっている。発表内容はバラエティーに富んでおり、聴衆も大いに楽しんだコンテストであった。なお、審査は本学法学部教授ジョン・ハミルトン先生、本学講師 祖父江美穂先生が担当してくださった。司会は、本学法学部助教 北尾泰幸が担当した。厳正な審査の結果、以下の3名が入賞者となった。

- 第1位 06M3281 鈴木 亮太  
“The Bond Family”
- 第2位 06M3631 萩原 佳子  
“Cheerful Mother”
- 第3位 06M3573 小河 大樹  
“My Experience Record”

第1位の鈴木亮太君（経営学部）は、本学イギリスセミナーに参加した際、お世話になったホストファミリーについてスピーチをしてくれた。大家族のホストファミリーならではの心温まる話であった。堂々とした落ち着いたスピーチであった。第2位の萩原佳子さん（経営学部）は、本学オーストラリアセミナーに参加した際に滞在したホストファミリーのお母さん（ホストマザー）についてスピーチをしてくれた。ホストマザーの大きな性格が目につかぶとともに、日本とオーストラリアの文化の違いがよく分かるスピーチであった。第3位の小河大樹君（経営学部）は、本学イギリスセミナーと本学アメリカセミナーに参加した体験談を語ってくれた。イギリスおよびアメリカでの留学生活が目につかぶとともに、日本と両国だ

けでなく、イギリスとアメリカの文化の違いもよくわかるスピーチであった。

今回の入賞者は偶然にもみな本学海外セミナーの参加者であったが、他の学生諸君のスピーチも自分の考え・夢・目標について語ったり、自分の旅行や学習体験について語ったりしてくれた力作揃いのスピーチであった。参加者が自分の思いを英語で語る楽しさを、身を持って体験してくれたコンテストになった。（北尾泰幸）

### ドイツ語部門

2008年度の名古屋語学教育研究室主催第14回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2008年11月28日（金曜日）の午後4時45分より名古屋校舎中央教室棟3階にある第1研修室でおこなわれました。その結果を報告したいと思います。

今回の課題は、“Einen Kaffee bitte!”という題名のA4で1ページ弱のものを選びました。内容は前半と後半に分かれていて、前半はウィーンの喫茶店とそこで提供されるコーヒーについての紹介です、後半はその喫茶店における筆者のおかしな体験を語ったものです。

参加者にとって新規のテキストとなるため少し難しく思われたようで、1年生の参加者は残念ながら1名でした。その代わりに2年生以上の学生ががんばってくれましたので、合計では15名の参加がありました。

審査にあたったのは、ドイツ語の非常勤講師をお願いしている鶴田涼子先生と経営学部所属のドイツ語担当教員である私（島田了）の2人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

決して難易度は高くないテキストですが、授業で扱ったものではないためそれなりの準備と練習が必要です。基本となる発音・アクセントの確か

さはもちろんのこと、今回はテキストの内部に大きな文体の違いがあり、その表現のために深い理解と技術が必要とされます。それでも参加者は各自で熱心に練習に取り組んだ様子で、高いレベルでの完成度を競う結果になりました。参加者いずれも優劣つけがたく、本当にわずかの差で順位を決めざるを得ませんでした。結果は、第一位（優勝）小野田達彦さん(07J1060)、第二位稲垣理佐さん(08J1353)、第三位松本憲二さん(07M3588)となりました。なかでも第2位の稲垣さんは、参加者のなかで唯一の1年生でありながら入賞というすばらしい結果を出しました。

他の外国語に比べて履修者が多いとはいえないドイツ語部門でこれだけの参加者があったという事は大変すばらしいことです。ドイツ語の履修者の関心や質の高さは大いに評価したいと思います。法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心としたキャンパスのため、相変わらず外国語の1クラスが40名程度であるなど、決して満足のいく外国語教育の環境でない事は変わりません。それにもかかわらず、これだけ熱心にそして上手にドイツ語を話せる学生がいるということは、ドイツ語の担当教員として大変うれしく思います。

現在、世界はその文化や価値観の多様化を認め合うという望ましい方向とは違う方向へ大きく動きつつあります。ドイツ語やその他の外国語もこの流れのなかで大きな試練にさらされています。ドイツ語は、実用という点では英語や中国語などに比べてその利点が見えにくいと思います。しかし外国語を理解する楽しみとは、異なる文化や価値観を発見することであり楽しむことでもあるということ、1人でも多くの学生さんにこの楽しみに気づいてもらえたらと願っています。

最後になりましたが、意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員みなさんのおかげで今回もこのような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。（ドイツ語・島田）

ラッセン先生に審査をお願いして開催した。参加者は1年生：6名、2年生：8名、3年生：1名、4年生：4名の計19名であった。前回と同様、1年生の積極的な参加が得られたことは喜ばしいことである。

さて、フランス語部門においては、例年、あらかじめ与えられた課題文を全員に朗読してもらい、その中で発音や読みの正確さを基準に数名を選抜し、その人たちにその場ではじめて見るテキストを朗読してもらって入賞者を決定するという予選・決戦の2段階方式をとっている。今回もこの方式を踏襲したが、予選および決戦で用いたテキストの内容を変えた。すなわち、前回までは詩やシャンソンの歌詞など文学的なテキストを用いてきたのに対し、今回は電話でのやりとりという日常会話をテキストにしたのである。

予選、決戦ともに接戦で、とくに目（耳？）を引いたのは1年生の頑張りである。全参加者の中で最もよく練習してきたのが1年生の諸君ではないかと思われる。週に1回の授業を1年足らず受講しただけで綴り字と発音の関係をきちんと理解し、正確に読めるようになるのはかなりの困難を伴わざるを得ない。その点、さすがに4年生になるとかなり正確な読みができるようになり、この点で1位と2位が4年生であったことは、自然な成り行きといえなくもない。そのようなハンディがありながら、1年生が3位に入賞したことは、賞賛に値する。ラッセン先生は、講評の中で「発音は1年生がいちばんよかった」と言っておられた。

いずれにせよ、積極的に参加してくれた諸君全員の健闘を讃えたい。また、今回入賞を逃した人たちも、今後の学習次第と練習次第で誰にでも入賞の可能性があるので、ぜひとも再挑戦していただきたい。

入賞者は次の通りであった。

- 第1位 05M3652 尾関 洋
- 第2位 05M3607 橋本 彩香
- 第3位 08J1006 関 麻央里

（田川光照）

## フランス語部門

第14回外国語コンテスト・フランス語部門は2008年12月5日、国際コミュニケーション学部の

## 中国語部門 (法・経営)

第14回外国語コンテスト「中国語 (法学部・経営学部部門)」は、2008年11月18日 (火曜日) に209教室において午後4時50分から6時30分まで行いました。当初は66名の申し込みがありましたが、当日の参加者は61名でした。この参加者数は、これまでのコンテストのなかでも最多の人数でした。

参加者には今年も例年と同様に課題文の朗読を課しました。これまでは、学習歴を考慮し、1年生と2年生以上との課題は分けておりましたが、今年は評価の基準を統一しようとの考えから、初めての試みとして学年を問わず同一の課題文に挑戦してもらうことにしました。

課題は、「生日 (誕生日)」というタイトルの中国の笑話で、発音の難しい箇所が随所に見られる対話文でした。er化音や「生日」の「日 (ri)」のような日本人にとっては最も難しいとされる音、第3声が続く場合の変調など、これらを正確に発音することが出来たかどうかを評価の対象としました。参加者が多かったにもかかわらず、予想以上にレベルが高く喜ばしい結果となりました。審査員は、経営学部の矢田博士先生と法学部の鄭高咏の2名が担当し、厳正な審査の結果、以下の3名を入賞と決定しました。

第1位	06M3227	小島 梓
第2位	07M3028	松岡 優弥
第3位	07J1243	小木曾 正幸

第1位に入賞した小島さんは、「自分はいつも発音に自信がなくて、どちらかというと苦手なほうですが、一生懸命練習してよかったです」と自らが受賞したことに驚いておりました。小島さんの落ち着いた態度と、洗練された正確な発音には、審査員いずれも感心いたしました。第2位の松岡君は、「こんなに真剣にやろうと思ったのははじめてです。よかったです」と照れくさそうに微笑んでおりました。松岡君の真剣に勝負をしようという努力と姿勢は、普通の彼からはとても想像できない、別人のような意気込みを感じました(笑)。そして、第3位の小木曾君の流暢な朗読は、印象

的で聴衆を魅了しました。小木曾君は「頑張りました」という一言の感想でしたが、その卓越した流暢さにさらに声調の安定さが加われば、より上位の成績を収められるものと思われます。

今回は1年生の参加者は2名だけでしたが、来年はより多くの学生が意欲的に参加してくれることを心から祈念しております。(鄭 高咏)

## 中国語部門 (現中)

第14回外国語コンテスト中国語部門 (現中) は、2008年12月4日 (木) 13:30から、課題部門10名、自由部門3名の合計13名が参加して行われました。審査は昨年同様、顧明耀先生、高明潔先生、安部の3名で行いましたが、今回も参加者が少なく、とても残念でした。今後はより多くの学生が参加してくれるのを期待していますし、我々もコンテスト参加者が増えるように一層努力していきたいと思っています。内容的には昨年同様すばらしい発表が多く、参加者のこのコンテストにかける意気込みが十分に伝わってきて、審査員一同感心させられました。

課題部門は、「会叫的猫 (鳴き上手な猫)」という文章を暗誦してもらいました。内容は、ある村に住む一匹の鳴くのが得意な猫が友達の猫に、自分の鳴き声はすばらしくて、村中に聞こえるような大声で夜通し鳴くことだってできるのに、どうして村人が自分を嫌うのか分からないと相談したところ、君は鳴いてばかりで猫の仕事の本質がわかっていないと諭されるという話です。出場者は、この少々ストレートな寓話を、2匹の猫のやり取りを通してとても表情豊かに発表し、例年のことながら審査に大変苦労しました。厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

1位	08C8022	下地 江梨奈
2位	08C8027	大島 卓子
3位	08C8018	臼井 志保

自由部門は3名の参加でしたが、レベル的には例年と比較しても遜色のないものでした。ただ参加人数が少ないため、第1位のみでの選出となりました。

1位	05C8150	伊藤 えり
----	---------	-------

伊藤さんのスピーチは、「火車上的一件小事

(車中の出来事)」というテーマで、中国を友人と旅行した時に、列車内で中国トランプをしていると、周りの乗客があれやこれやと色々口を出してきて、みんなで大いに盛りあがった。このささやかではあるが心温まる経験が、彼女に人と人との交流の楽しさと大切さを再認識させてくれたというお話でしたが、伊藤さんのその人物になりきったような表現力のすばらしさに圧倒されてしまいました。伊藤さんは、京都で行われた第3回中国語スピーチコンテスト(一般の部)にも出場し、最優秀賞となっています。(安部 悟)

## 韓国・朝鮮語部門

第14回外国語コンテスト本選が、12月2日(火) P.m.4:30から開催。参加者38名の盛会。審査員は韓先生、常石の2名が担当。38名もの熱演のため、審査は困難をきわめたが、入賞者は以下のようになった。

第一位	河合 宏紀	05 J 1276
第二位	中村 裕紀子	07M3193
第三位	小笠原 由子	06M3506
特別賞	伊藤 泉	08 J 1133

上記以外にも、ほとんど入賞者と差異のない実力者が多かった点、前回第一位の趙 顕樹君(05M3178)の特別参加発表、および努力を特に評して伊藤泉さんに特別賞が授与された点、などを記しておきたい。

韓国・朝鮮語は文法や語順などが日本語ともっとも近い言語である反面、発音という面では決して易しい言葉ではない。そうした韓国・朝鮮語のスピーチの難しさを、ほとんどの参加者がよく消化して自分のモノとしていた。審査に当たった2名の教員は、この点をすなおに喜ぶと共に、参加者の皆さんに賛辞を贈りたい。(常石希望)

## 日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない学生を対象に開かれています。今年は「留学生の見た日本」というテーマで、自分の

体験を盛り込み、身近な出来事を通して考えたことを、自分のことばで述べることを課題でした。

法学部・経営学部・現代中国学部の1年次の留学生は毎年全員参加でこのコンテストに臨んでいます。60名近くになりますからクラス予選を行います。日本語の3クラスからそれぞれ3名の代表者が選ばれ、計9名が本選に進みました。本選へは他の学年の留学生も自由に出場できますが、今回は申し込みがなく、2008年12月4日(木)に1年生9名で競うことになりました。

今年のコンテストで特徴的だったのは、日本人との交流の中で、割り勘などの習慣の違いや日本語の表現の婉曲さなどに戸惑いながらも、その背景にある日本人のやさしさや思いやりに気付いたといった内容のスピーチが多かったことです。一人で日本へ来て大学で学ぶ留学生たちが出会っているはずの困難や苦労については今回語られませんでした。日本留学を通じて、文化の違いを超えて大きく成長している姿は聞く者に大きな感動を与えました。

審査は、日本語科目担当教員2名(梅田・架谷)、学生審査員2名(留学生・日本人学生ともにスピーチ入賞経験者)、聴衆約60名の投票によって行われ、拍手と熱気の中、下記の3名の入賞者(敬称略)が決定しました。第一位の陳美霖さんのスピーチは故郷の大地震のあとの日本人の支援に感謝しつつ、自己の使命に気付いていくという内容で、表彰式の発表でも聴衆に強い印象を残したように思われます。同じキャンパスで学ぶ留学生たちの声を直接聞くには外国語コンテストはよい機会になりますので、日本人学生のみなさんも是非一度聞きにきてください。

- 第1位 08C8164 陳 美霖 (チン ミリン)  
「災害の後に分かったこと」
- 第2位 08C8194 徐 俊 (ジョ シュン)  
「青い目 茶色い目」
- 第3位 08C8183 林 在訓 (イム ゼフン)  
「コンビニの店員さんが教えてくれたこと」

(架谷真知子)